

合同研究会開催報告

ネオ・サイバネティクス研究会 情報システム学会基礎情報学研究会

ネオ・サイバネティクス研究会と情報システム学会基礎情報学研究会は、合同で連続研究会「情報と創造性」を開催することになり、10月24日、第1回研究会をオンラインで開催した。

第1回「創造性をめぐるシステム進化と階層性」

日時：2020年10月24日（土）13時00分～14時45分

場所：オンライン（Zoomを使用）

発表者：大井奈美（山梨英和大学）

コメンテーター：名執基樹（富山大学）

参加者：27名

講演の要旨：本発表では、現代情報社会における創造のあり方を、(1) 機械的創造性と (2) 生命的創造性とに便宜的に分けて考察した。一方で (1) は、「機械による創作」だけでなく、より広義に、所与のルールに基づいた判断一般を指すものとした。いわゆる自立的個人による、コンピュータのように誤謬なく効率的な理性的判断が典型例と考えられる。他方で (2) は、そのつど直面する状況に試行錯誤しながら対応・判断することを指して用いられた。(1) と (2) との関係については、一方が他方よりも優れているというような関係ではなく、相補的關係にあり、精確には、(2) の一部として (1) が実現されるものと位置づけた ($1 < 2$ という関係)。

(1) も (2) も有益である一方で、固有のリスクもあると考えられる。すなわち (1) が極端化すれば、効率性や無謬性などの判断基準が絶対視されかねない危険がある。そして (2) が極端化すれば、現実と乖離した思い込みや妄想を作りあげて信じ込んでしまうかもしれない。

こうしたリスクの背景には、(1) と (2) がともに、創造の主体を個人（または担体の心的システム）として想定することに、その理由の一つがあるように思われる。個人が常に単独で何かを創造・判断・認知すると想定すれば、その基準が外部から与えられたものであれ内的に作られたものであれ、その単一の基準の盲点に気づくことは困難と考えられるからである。

これについて、機械と生命との関係について考察するサイバネティクスの系譜にある G. ベイトソンは、認知の主体を個人（システム単体）ではなく、システムと環境からなる一種の生態系のような「精神」として捉えた（生態学的認識論）。敷衍すれば、創造の主体も「システム+環境」ということになる。これは、たとえば心理学における「リフレクティング」の手法などの基礎の一つである構成主義の考え方にも通じると考えられる。ベイトソンによれば、このような「システム+環境」は進化の単位でもある（進化≠進歩という点に注意が必要である）。

サイバネティクスの考え方をより純粋に認識論的・意味論的に展開させた「ネオサイバネティクス」では、システムの環境もシステムが認識論的に作り上げたものと考えられる（ただし独我論とは区別され

る)。こうした観点から創造性について考える研究が、西洋の近代小説を題材として、70年代からドイツを中心に行われてきた。そこでは、文学システムと、それをとりまくメディアや教育などさまざまなシステムとが「共進化」することで、近代文学史が成立してきたと論じられてきた。極端に言えば、文学システムが、文学をとりまく様々な環境を作り上げてきたとも言えるのである。

しかしこうした研究は、文学システムを主に社会システムの一つとして捉えたことにより、文学の社会的な機能だけが注目されてしまい、創造のルールが変化する文学システムの進化がいかにかに生じるかという詳細な考察は難しかった。本講演では、基礎情報学における「システムの階層性」概念を応用することで、システムの創造性や変化の力そのものへアプローチする研究観点を提案した。

なお、本連続研究会は、科学研究費助成事業（研究課題/領域番号：20K12553、研究種目：基盤研究(C)、研究期間：2020～2022年度）による共同研究「機械と人間との感性および創造性の異同をめぐるネオ・サイバネティクス的研究」の一環として、情報システム学会基礎情報学研究会およびネオ・サイバネティクス研究会の合同で開催された。

(大井 奈美 記)